K

現代の文学＝14

# 丹羽文雄集

欲望の河
―全―
こおろぎ
崖下

河出書房新社

現代の文学 14　丹羽文雄集

© 1963

責任編集

川端康成　丹羽文雄
円地文子　井上　靖
松本清張　三島由紀夫

昭和38年10月1日　初版印刷
昭和38年10月5日　初版発行

定価　390円

著　　者　丹羽文雄
発行者　河出孝雄
印刷者　高橋武夫
装　　幀　原弘(N. D. C)

印　　刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函　　貼・神崎製紙(ミラーコート)
同納入・東邦紙業株式会社
クロース・日本クロス工業株式会社
同納入・株式会社小島洋紙店

発行所　東京都千代田区神田小川町三の八　株式会社　河出書房新社

電話東京 (291) 3721～7
振替口座 東京 10302

製本・加藤製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

# 目次

欲望の河……三
こおろぎ……五三七
崖　下……五五七
年　譜……五七五
解　説……中谷　博……五八一

挿画　伊勢正義
写真　三木　淳

# 丹羽文雄集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

# 欲望の河

# となりの人

山のせまった田舎道をバスで二キロほど走ると、小さい村にはいり、停車した。村の停車場はどこもおなじようで、駄菓子屋をかねた飲食店が発着所になっていた。そこでバスの切符を売っている。軽食堂というところだろうが、店のかまえに似合わぬ大きな看板をあげていた。その店で切符を買ったらしい百姓風の、もんぺすがたの女が声高に運転手に話しかけながら、のりこんできた。バスが動きだした。その客で、座席は満員となった。飲食店の向い側の理髪店の大鏡に、動きだしたバスが映った。

舗装はされていない道路だが、田舎道にはめずらしく幅がひろく、平坦であった。昨夜東京からかえってきたばかりの正木暁には、東京都内にはこれよりもお粗末な道がいくらもあると思えた。

――ここを通るのも十年目だ。

都会であれば、一年も経てば、街のすがたは変ってしまう。武蔵野のおもかげをのこした田園にも、一夜にして近代的な集団アパートができあがるのだ。一夜にしてという形容が、ぴったりする。が、瀬戸内海に面したこの田舎では、一年はおろか、十年が経っているのに、暁にはほとんど変っているとは思えなかった。店の形、森の位置、川のながれ方に、十年前の記憶があった。暁の記憶をそっくりそのまま維持するために、自然はすがたを変えていないのだった。暁はこのバスの終点である孤峯寺へ、住職をむかえにいくところである。十年ぶりにふるさとにかえってきた自分が、田舎道をバスにゆられて、孤峯寺に出かけていくのが、以前からの約束ごとのように思われた。十年間の空白をとりかえすには、十年昔の行動を再現することにあるようだった。たしかに暁の期待は、みたされたようである。十年をひととびにして、往時に自分をおくことができた。

「暁が帰省したこの機会に、父と母の法要をやってしまいたい。こういう機会は当分きそうにないから」

兄の正員がいいだした。

「法要というと、孤峯寺のお住持をよぶんですね」

「そうだ、だれかに迎えにいってもらわねばならない」

日がえりというわけにはいかなかった。ひと晩どまり

で迎えにいくのである。
「その役をぼくが買おう」
「だって、暁さんはかえってきたばかりなのに……」
と、嫂がためらった。
「いや、本人が申出るのだから、暁にいってもらおう。暁は小さいときから、お寺のすきな子供だったから」
「ああいうお寺の雰囲気は、東京ではちょっと味えない。真玄和尚は、達者かしら」
「七十歳になられたが、かくしゃくたるものだ」
バスは通称、七曲りとよばれている危険な道にさしかかった。
片方が絶壁であり、片方は海だ。高いところになると、道路は海面から十三、四米もあった。道路もせまくなっていて、岬を七へんまがらねばならなかった。土地のひとは、七曲りと呼んでいる。暁の伯母が若いころ、ちょうど小学校にかよいはじめた暁を自転車にのせ、孤峯寺の住職をむかえにいく途中、自転車ぐるみ海に転落した。幸い、そこは海面に近く、また潮がひいていたので、ふたりともいのちには別条がなかった。暁は上手にほうりだされて、傷らしい傷もうけなかったが、伯母は全身繃帯につつまれ、四キロの道を戸板ではこばれた。危険な道だが、暁はこのあたりの景色がすきだった。都会生活で、たびたび思いだすのは、七曲りの風景である。七曲りは、十年前とすこしも変っていなかった。汀にうちよせる波も、十年前のもののようである。孤峯寺行きを買ってでたのも、この景色にひさしぶりに接することができるからだった。といって、わざわざ出かけていくほどの風流な気持もなかった。暁のもっている時間は、小きざみに慣れていた。何となくいそがしいのである。のんびりと風景をたのしんでいる気持にはなれないのだ。
――お寺のすきな子供か。
都会生活ではわすれてくらしているのだが、ふるさとにかえると、幼いたましいが生きていたことが知らされる。暁の中に生きていなくとも、肉親の中に生きているのだった。父母がとなえるお経をいつもきかされている内に、暁は暗記してしまった。大師和讃をそらでとなえて、大人をびっくりさせたことがあった。盆と暮には仏壇の掃除をする習慣であったが、暁は父母にほめられたいからするのでなく、したいから手伝うのだった。しまいには、
「暁をうちの寺にもらいうけたいのだが」
と、孤峯寺の真玄和尚に申込まれた。暁の幼い心は、大いに動いた。身内のひとりが僧侶になれば、一家一族がすくわれるという思想が十分に生きている土地柄であった。家族はのり気になった。が、兄の正員が強硬に、

「暁は子供だから、お寺へいきたいかも知れない。しかし、その欲望が暁の一生を通じてゆるがないものだとは考えられない。子供が郵便屋さんになりたがったり、陸軍大将になりたがったり、機関車のかま焚きになりたがったりするのとおなじ心理だ。大人が自分らの感情で、子供の夢に便乗することは危険だ。とりかえしのつかないことになる。暁がどうしても寺の人間になりたいのだったら、暁にその判断が十分くだせるようになってからでも、おそくはない」

反対したので、坊主になることは実現しなかった。が、二十九歳になっても、暁は寺院の雰囲気がすきだった。そのことは坊主になるとかならないということとは関係がなかった。バスの乗客は七曲りの危険にさしかかっても、のんびりと話をしている。中には、運転手に話しかけるのもある。

暁は、方言まじりの乗客の話に耳をかたむけていた。なつかしい、耳に馴れた方言である。方言の中に、暁の少年時代が生きていた。七曲りの危険もかえりみず、乗客はたがいに畑の作物の話をしたり、どこの嫁ははたらきものだとか、際限のないおしゃべりである。料金だけの距離をはこばれていくのが、バスにのりこんだ目的であるにしても、都会ではそれが現金すぎる。田舎のひとのように、このいっときをたのしむ心の余裕がないのだ。暁はときどき、窓の外に視線をむけた。内海の島島、とおくに中国地方の山々がながめられる。島のすがたがはっきりとみられないのは、かすみのせいであろうか。暁のとなりに腰かけていた、七十にちかい老女がだしぬけに暁に話しかけた。

「あなたはいっこうこのあたりで見かけない顔だけど、浅井村にいかれるのですか」

方言まじりの会話の中で、思いがけなく標準語をきいたおどろきで、暁は老女の顔をみた。

「そうです。孤峯寺にいくところです」

「お寺さんへですか。あなたの檀那寺は孤峯寺さんですね。失礼ですが、どちらのお方でしょうか」

品のよい老女である。暁はまわりの乗客とすこしちがった服装であることに、気がついた。東京の街で話しかけられている感じであった。

「坂田の正木といいます」

「正木さん？」

老女の表情はその名を知っていた。暁をじっとみた。

「正木邦正さんの息子さんですか」

「はい」

「お父さんのご法事で……？」

「はい、父の七回忌にあたりますので、お寺さんを迎えにいくところです。父をご存じだったのですか」

「正木さんの本家は、浅井村でも旧家ですから、よく存じ上げております。お父さんと私は、二つ年齢がちがうだけで、よく存じ上げておりました。私は息子と、八年も東京に出ておりましたので、そのあいだにあなたのお父さんがお亡くなりになったのですよ」

と、暁の顔をしげしげとみて、

「そうおっしゃれば、あなたはお父さんにそっくりでいらっしゃいますね。東京のおことばのようですが、あちらにおすまいですか」

「昨日東京からかえってきたばかりです。四、五日滞在して、また東京にかえります」

「私の三男も、東京につとめております。八年ばかり、本郷でくらしてました。東京は何かにつけて便利でございますが、私のような年よりになりますと、田舎が恋しくて、最近かえってまいりました」

頭髪は半白だが、七三に分けて、櫛の目がとおり、清潔な感じであった。顔もふくよかである。黒ずくめのきものが、色の白い顔をひきたて、七三の頭とよく似合っていた。かなり裕福な家のひとらしい。

「のちほど、お寺さんまで、息子の住所をお知らせいたしますから、おかえりになりましたら、息子ともおつき合いして下さい」

この地方は半農半漁であり、ことばの悪い点では名が知られている。坂田村の年ごろの娘のことばをきくと、はじめてのひとはびっくりして、その顔をみつめるほどである。八年もの都会生活の経験から、老女がすっかり東京弁になっているのは、当然だった。暁は、老女の名が知りたかった。肉体労働の経験もないらしく、からだの線はやわらかそうである。老女が名のらない以上、暁の方からきくのは失礼な気がした。車内の感じでは、だれもが老女を知っているらしい。その気配から、老女は名のる必要を感じていないらしかった。

――いずれ孤峯寺の住職にきけば、わかることだ。

暁は、老女がそばにいることに多少の気づまりを感じていた。バスは七曲りの難所をすぎ、浅井村にはいった。入江をかこんだ村は、三日月型をなしていた。人家は散在している。うしろの方は段々畑のひくい山で、桃の花が咲いていた。暁のたずねる孤峯寺は、村のほぼ中央にあった。暁は老女とつれだって歩く形になった。十年前にみた鍛冶屋も、その店先の暗いのもそのままだった。道であう村びとは、老女に対して最敬礼にちかいあいさつをした。老女にとっては孫ほどにみえる暁を、村びとは好奇心からながめている。孤峯寺の前にくると、

「私どもの方へも、おあそびにおいで下さい」

といい、別れていった。暁は見送った。しっかりした足取りである。十年ぶりにふるさとをたずねれば、空白

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

になった部分にも多くぶつかるのだ。老女もそのひとつであった。

浅井村は一軒のこらず孤峯寺の檀徒であった。山門も本堂も鐘楼も、どっしりとした構えで、歴史の古さを物語っている。境内は、二反歩ほどのひろさであり、本堂の屋根の高さよりも高い松の木が数本あった。梅と桃が、松と調和をとって植えられている。ここも、桃の満開だった。暁は本堂の正面で、しばらく立っていた。十年昔の感じがそのままのこされていることが、信じられないようであった。ひとかげはなかった。入江の波はおだやかで、ここまではきこえてこない。大きなものわすれをしているような気がした。

暁は勝手知った庫裡の内玄関にはいった。

「今日は」

大きな声を出した。内玄関の土間は、そこだけで十畳ほどのひろさである。暁の声が、庫裡の奥まで風のようにとおりぬけた。返事もなく、ジャンパーすがたの寺男があらわれた。老人であった。暁には見おぼえがあった。暁はにやにやとした。老人は笑っている暁をしばらくながめていたが、

「正木のお坊ちゃんではないですか。これは、おめずらしい。お元気で何よりです。お住持もおいでです。すぐお呼びしてきます」

と、高いかまちにかけ上るようにした。二十九歳になりながらお坊ちゃんと呼ばれたのは、くすぐったい。

やがて、庫裡の床を鳴らすような歩き方で近付いたひとが、声が先で、

「正木の坊主きたか。さあ、上がれ、上がれ」

と、真玄和尚があらわれた。七十に近いのだが、肥り気味で、血色がよい。和尚は立ちはだかるようにして迎えた。なつかしさが、暁の喉にこみあげた。暁は和尚のうしろから、和尚の居間にとおった。床を背にし、赤紫檀の大机を前にして、和尚はにこにこして暁をみまもった。暁は両手をついた。

「ごぶさたしてます。お住持さまもお元気で、何よりです」

「おや、坊主、一人前にあいさつをするようになったではないか。あっははは。もっとこっちに来い。机のそばに来い」

昔から気骨をもって知られている真玄だった。暁は小さいときから、坊主とか、お前と呼ばれた。口の悪いのは、昔からである。が、口が悪いと一般に思いこませてしまうのも、利口な世わたりの手段かも知れなかった。その反面、あたたかい、人情のある和尚と信じられていた。こういう態度は、田舎でこそ大いにみとめられるものである。暁は小さいときから、このやり方でまるめら

れているので、いまさら真玄和尚を批判する気持もおこらない。和尚は村の面倒をよくみた。村びとも、和尚を信頼し、したっていた。村長よりも、村の駐在巡査よりも、村のいざこざには和尚が役に立った。昔からそうであったが、現在でもその権威は通用するのである。権威といったところで、固苦しいやり方ではない。真言宗の孤峯寺である。仏ごころを胸におさめて、村の紛争をさばくので、村びとも結局仏にはかなわないようであった。真玄の居間は、南向きで、十畳のひろさである。和漢の書物が、壁をふさいでいる。桃の花がいけてあり、大雅らしい軸がかかっていた。幼いときの暁は膝をそろえて、今日のように和尚とさしむかいになっていた。幼い暁が、ここにすわっているようである。自分がそれを感じているのだから、和尚が二十九歳の暁の上に幼い暁を見出しているのは人情というものであろう。五十年配の婦人が、お茶をはこんできた。小柄な婦人は暁にむかい、

「正木の坊っちゃん、おひさしぶりです。東京においでときいておりましたが、お元気そうで……いつも、お噂をしていますよ」

「おばさんにもお変りなくて、結構ですね」

と、暁はあいさつをした。和尚の細君であった。浄土真宗とちがい、真言宗では、肉食、妻帯はゆるされていなかった。しかし、それは表向きのことであり、今日ではどこの宗派も、肉食、妻帯を行なっているのだ。が、真玄和尚はこそこそとふるまわなかった。

「おれは、ほかの坊主のように、表面だけ行ないすましてて、かげで悪いことをやるようなまねはしない。やるなら、堂々とやる。坊主だって、生きている人間だ。男なら女がほしい。女がなければ、性の問題は片付かない。それが人間の宿命だ」

和尚は、十五も若い妻をめとった。

「人間というなま身のものにさからっては何にもならない。仏は決して人間にむちゃな注文は出していないのだ。坊主が勝手に、仏のこころをむつかしく仕立てたのだ。第一女がそばにいなければ、年中汗くさいからだをして、ひとに迷惑をかけるだろう。不自然な生活をしていて、清浄なものをひとにあたえようというのが、第一阿呆な注文だ。肉も魚も食わなければ、栄養失調になってしまう。だから、檀徒はおれのことについては、何もいわないでくれ。おれをそっとしておいてくれ」

和尚の細君は堂々と檀徒に会った。寺男にも、夫婦ものをやとっている。

「坊主がわざわざ出向いてきたのには、用があるのだろう。まさか、孤峯寺がなつかしくなって、漫然とやってきたのではあるまい」

「いいえ、そういう気持も大いにありました。嘘じゃありません」

和尚はわが意を得たという風に、大きくうなずいてみせた。

「父母の法要をくりあげて、ぼくがいるあいだにやってしまいたいと兄がいいだしたのです。それで是非お住持にご足労ねがおうと思いまして」

「よし、承知した」

香のよい茶を、暁はのんだ。和尚の居間から入江をながめていると、画の中の人物のような気が暁はする。入江には大きな変化はないのだが、刻々に変化していた。海の色がちがってくる。船が出ていく。水脈がゆったりとながくのこった。人間が米つぶほど小さくながめられる。人間がのんびりと動いている。

「坊主は東京で機械をつくる会社につとめているといったな」

「はい、精密機械をつくる会社ですが、事務の方をやってます」

「どういうものか、わしにはよくわからないが、あたえられた仕事を忠実にやることだ」

「はい」

「本家にも案内にいくのだろうね」

浅井村には、正木家の本家があった。

「まいります」

暁は、バスの中の上品な老婆を思いだした。

「バスの中で口をきいた方ですが、髪を七三に分けた、七十歳ぐらいの、品のよいおばあさんに会いました。私の名をきいたり、私の父のことをよく知っていられるようでしたが、いったいこの村のどなたでしょうか」

和尚は入江の方へ視線を向けていたが、その目を暁にもどすと、

「貝原(かいばら)のご隠居さんだ。お前の本家の正木家と一、二をあらそう浅井村の旧家だ。何かお前にかわった話でもされたのか」

「バスの中ですから、そんなに話はしなかったのですが、私の顔をつくづくみて、お父さんによく似ていると……父のことをくわしく知っていられるのが、不思議でした」

「そうか、ご隠居さんもやっぱり昔のことがなつかしいのだ。わすれられないのだよ」

海をへだてているので、地つづきでひろがる文明の手も、ここまでは容易にのびてこないようであった。とりのこされたような村である。十年昔のことも、昨日のように記憶され、話題になる土地柄である。貝原の老女が、坂田村の正木の父の中学時代のころをおぼえていたにしても、すこしも不思議ではなかった。が、それとは

別に、暁は父のことが知りたかった。
「私には、父の若いころのことが何もわかっていないのです。知りたいと思います」
「そうだ、もう、いいだろう、話しても」
そのいい方が、暁の好奇心をそそった。
「父がどうかしたんですか」
「貝原のご隠居さんも、あのお年だし、子供が親のことを知るのも、よいことかも知れない。何も悪いことではないのだ。しかし、ひとにしゃべってはならないよ。いいかね」
「はい」
「ほんとうは、坊主のお父さんと貝原のご隠居さんとは、夫婦になるはずだったのだ」
息をのむほどのおどろきだった。思いもかけない知識になった。もしそれが実現されていたならば、暁は存在しないことになる。生れていたにしても、どこのだれを父にもったかも知れないのだ。一匹の精虫のはたらきという生物学的には片づけられない問題であった。暁は、人生を感じた。和尚はまず、暁に思いもよらない一撃をあたえておいて、おもむろに話をはじめた。
浅井村では、正木家と貝原家が領主から苗字帯刀をゆるされた名家であったという。
そのとき、細君が昼食の支度について、和尚に相談にきた。
「幕末には、両家の長男は領主の警護に召しだされたものだ。そんな関係から、正木家と貝原家は親戚同様の交際があった。坊主のお父さんの邦正が、二里はなれた町の中学校にかようころ、貝原家の娘、芳野も、おなじ町の女学校に入学することになった。芳野が、ご隠居さんだよ。交通の便のわるかった時代だ。いまだってよいとはいえないが、両家が相談して、邦正と芳野を中学校の近くの家に下宿させることにした。ひとつ屋根の下でくらしているのだ、思春期のふたりだ、いつか相愛の仲になるのはあたりまえじゃないかね。ときどきうちにかえってくるときも、ふたりはいっしょだった。ふたりは入江をよくあるいていたものだ。村のひとも、ふたりを何かと噂のたねにするようになった。両家では、ふたりを将来結婚させることにした。それからというものは、ふたりは天下晴れての夫婦気取で、たのしい毎日をおくっていたのだ。学校を出ると、邦正はその才能を買われて、町の銀行につとめることになった。その時代だ、坊主のように東京の大学にいくような人間は、村にいなかった。坊主のお父さんは、次男坊だったからね、それに大勢雇人もいることだし、学校を出てすぐうちにかえって家業の手伝いをしなければならないということもなかったのだ」

正木家は、現在も半農半漁の家業である。

「だが、そのことが運命をくるわせることになったのだよ」

暁は、和尚の顔をみつめていた。うかつによそ見もできない思いである。和尚はひとに顔をながめられることに慣れている。職業柄、何十年来経験していることであった。ひとにじっとながめられていると、安心して、自分のいいたいことが口から出るのである。きき手の顔を、壁ぐらいにしか感じていないのかも知れなかった。その壁に、自分の信念の色彩をなすりつけるのである。きき手の顔にこちらの期待している表情がうかぶようになれば、ますます和尚の弁舌はさえてくる。この場合も、それだった。

「一方、貝原家の長女である芳野は、学校をでると自家にかえっていた。その後も、ふたりは文通したり、会ったりしていたのだ。が、だれも邦正の生活を監視しているものはなかった。芳野というきまった相手があるので、両親もそういう点では安心していたのだろう。ところが魔がさしたのだ」

といい、和尚がにやりと笑った。

「魔がさしたとは、いいすぎだ。これは、取り消すよ。ここにその、魔の産物がすわっているのだからね。ごめん、ごめん。だがな、貝原家からみたら、まさに魔がさしたにひとしい出来事だからね。邦正にすきな女ができたのだ。芳野を嫌っていたためではないのだよ。人間、やはり手近なものに人情がうつるのは、どうしようもないことだ。邦正も、さぞ悩んだことだろう。悪い悪いと思いながら、しょっ中顔をあわせている女性に心をひかれていくのは、どうしようもなかったのだよ。とうとうそのひとの腹を大きくしてしまったのだ。それが、坊主の兄だ」

過去の出来事として、笑ってすませてもよかったのだが、暁には笑えなかった。兄の出生の影には、由々しき背信が行なわれたのだ。ひとりの女の人生をふみにじったのである。父の行為を自分のもののように暁は感じる。

「邦正もかくしているわけにいかなくなった。さんざん悩んだあげく、とうとう両親にうちあけたのだ」

暁の今度の帰省は、十年ぶりという意味だけでなく、自分のえらんだ女との結婚を兄にゆるしてもらうためであった。その話は、まだしていなかった。その女には結婚の経験があり、今年五つになる女の子まであった。兄がすなおにみとめてくれるとは思えなかった。おだやかに了解をもとめるつもりでも、その結果はわからない。暁の結婚については、兄にその心あたりがあるかも知れないからである。父は妊娠で、苦しんだように、現在の

自分が女の不利な立場で心を痛ませている。偶然の相似とも思われなかった。父とその子は、女の問題でおなじように悩んでいるのだ。

「正木家でもすててておけず、さっそく貝原家に正直に話して、わびをいれたのだよ。そして、邦正と芳野の結婚約束を白紙にかえしてもらった。邦正とその女とは、あらためて結婚式をあげた。銀行の同僚だったのだ。そのひとが、直子、つまり正員と暁のお母さんになったひとだ」

バスの中で話しかけられた老婆に対して、暁は申し訳がないと胸をしめつけられた。

和尚は暁の表情をたしかめながら、なおことばをつづけた。

「邦正にすれば、すきな女性といっしょになったのだから、満足だったろうが、芳野が可哀そうだ。すっかりうち沈んでいるときけば、正木家もすててておけない。たまたまとなり村の村長の息子に、邦正にひけをとらないくらいのがいた。正木家が仲人となって、養子にもらうことにした。邦正は本家を出て、坂田村で正木の分家をもつことになった。浅井村には、いづらかったのだろう。芳野と顔をあわすことはなくとも、貝原家の人間とはしょっ中顔をあわすことになるからね。坊主は坂田村でうまれているから、浅井村のことは知らなかったろう。坊主のところは、兄弟二人だが、芳野には、五人も子供ができた」

「さぞ、父はうらまれたことでしょうね」

父の気持が、暁にはよくわかるのだった。

「とおい昔のことだ。いまじゃ、何とも思っていないだろう」

「バスの中のご隠居さんの思い出話に、そんな事情があろうとは思わなかったのです。私なんか、あのひとの前には出られない人間ですからね。にくい奴の片われです」

「初恋というものは、生涯を通じてわすれることのできないものらしい。その後の人生は平穏だったから、思い出は美しい物に変わっているだろう。ご隠居さんは決して坊主をにくんではいないよ。むしろ、なつかしかったろう。しかも、坊主は父親そっくりの顔をしているのだからね。ご隠居もいまごろ思い出していることだろう」

「父は、雇人の男女関係にはきびしいひとでした。兄が中学生のころ、駄菓子屋の娘と親しくしているということを、とてもおこりました。厳格なひとだと、私たちはおそれていたのですが、皮肉ですね、そういう過去を父がもっていたなんて……」

「坊主のお父さんは、あのことだけが自分の人生における最大の失敗だったと述懐していた。だから、子供のお

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo